

看護学校の3大式典

災害医療センター附属昭和の森看護学校

橋口 広子

国立病院機構の病院附属看護学校（以下、「看護学校」という）において通称「3大式典」といえば、学校行事として行う「入学式」「戴帽式」「卒業式」のことである。補足だが、その中の「戴帽式」については、近年のナースキャップ廃止や男子学生の増加に伴い、名称を「誓いの式」、「継灯式」などに変更したり、戴帽式を廃止したりする看護学校もあると聞く。

式典とは広辞苑によると、「儀式」であり、「儀式」とは「公事・神事・仏事または慶弔の礼などに際し、一定の規則に従って行う作法。」と記されている。このようなことから考えると「儀式」としての式典には、厳かな雰囲気とともに華やかな演出が求められ、挙行する学校にとっては気苦労が絶えない学校行事の一つなのである。

当校は先日卒業式を終えた。卒業式の所要時間は90分程度であるが、そこに至るまでの事務的な準備、学生に対するいわゆる作法の指導（校歌など歌の練習、学生の動き方、卒業生・在校生挨拶文の指導）など多くのことを学校職員は数か月前から準備を始める。さらに、本番の卒業式の最中であっては、主役である学生たちが練習の成果を発揮できているか、来賓の皆様にも失礼はないかなど、学校職員は何かと落ち着かない気持ちで式の進行を見守っているのである。

このような学校行事のねらいについて、高等学校における学習指導要領¹⁾では「望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精

神を養い、協力してよりよい学校生活や社会生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。」としており、入学式や卒業式を「儀式的行事」と位置づけている。つまり、入学式・卒業式等の「儀式的行事」は、学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機づけの機会となるのである。

実際、看護学校の「三大式典」では、保護者、先輩学生あるいは後輩学生に見守られながら、母体施設を中心とした多くの病院職員の参列のもとに、国立病院機構・母体病院に関連の深い来賓の祝辞や心のかもった祝電をいただき華やかな花束が贈呈される。このような厳粛で暖かな雰囲気の中で、主役である学生たちは、医療人の一員になる志を新たにするとともに、国立病院機構に対する帰属意識を醸成する機会になっていると考える。

そういえば、卒業式の後、ある卒業生が保護者とともに、自分の就職する病院が贈った花束のもとで嬉しそうに記念写真を撮っている場面を見たことがある。その卒業生はその時のことを「就職する病院が自分を祝福して下さってとてもうれしかったです。」と話していた。彼女は、今ではベテランの看護師に成長し、病棟の実習指導者として後輩学生の指導に活躍している。このようにして、国立病院機構の理念である「患者の目線に立った懇切丁寧な医療・看護」は先輩から後輩へ受け継がれていくのだろう。

「3大式典」は毎年行うが、学生が与えてくれる感動や醸し出す雰囲気は毎年同じではない。なぜなら、出席者（学生、職員等）は毎回異なるため、相互作用であるその場の雰囲気も変化するからである。私たち学校職員は式典にあたり、今年はどういう式典になるのかという大きな期待と、学生は大丈夫かなという少しの不安をもちながら、今年も「3大式典」に臨むのである。

引用文献

- 1) 文部科学省「高等学校学習指導要領」（平成21年3月）